

電子情報と情報リテラシー教育

土屋俊
(千葉大学)

電子化による研究スタイルの変化

1. 研究者が自分でつくる「文献目録」の意味の変化
2. 「論文をコピーしてファイルしておく」という作業の意味の変化
3. 「引用文献を見に行く」という作業の意味と価値の変化
4. 論文で記述された事実を自分で再検証するという作業の意味の変化
5. 「最近の研究動向をサーベイする」という作業の意味の変化

10年前の文系研究者の研究スタイル

- 入門書、概説書を読む
- 研究書を読む
- 文献カードを作成
- 図書館で雑誌を探索(実は、研究室だけど)
- コピーをとる(ここで終わる論文が多い)
- 雑誌を読み、さらに文献を探索(飽和するまで)
- メモを作る
- 構想を練る
- 論文を書く

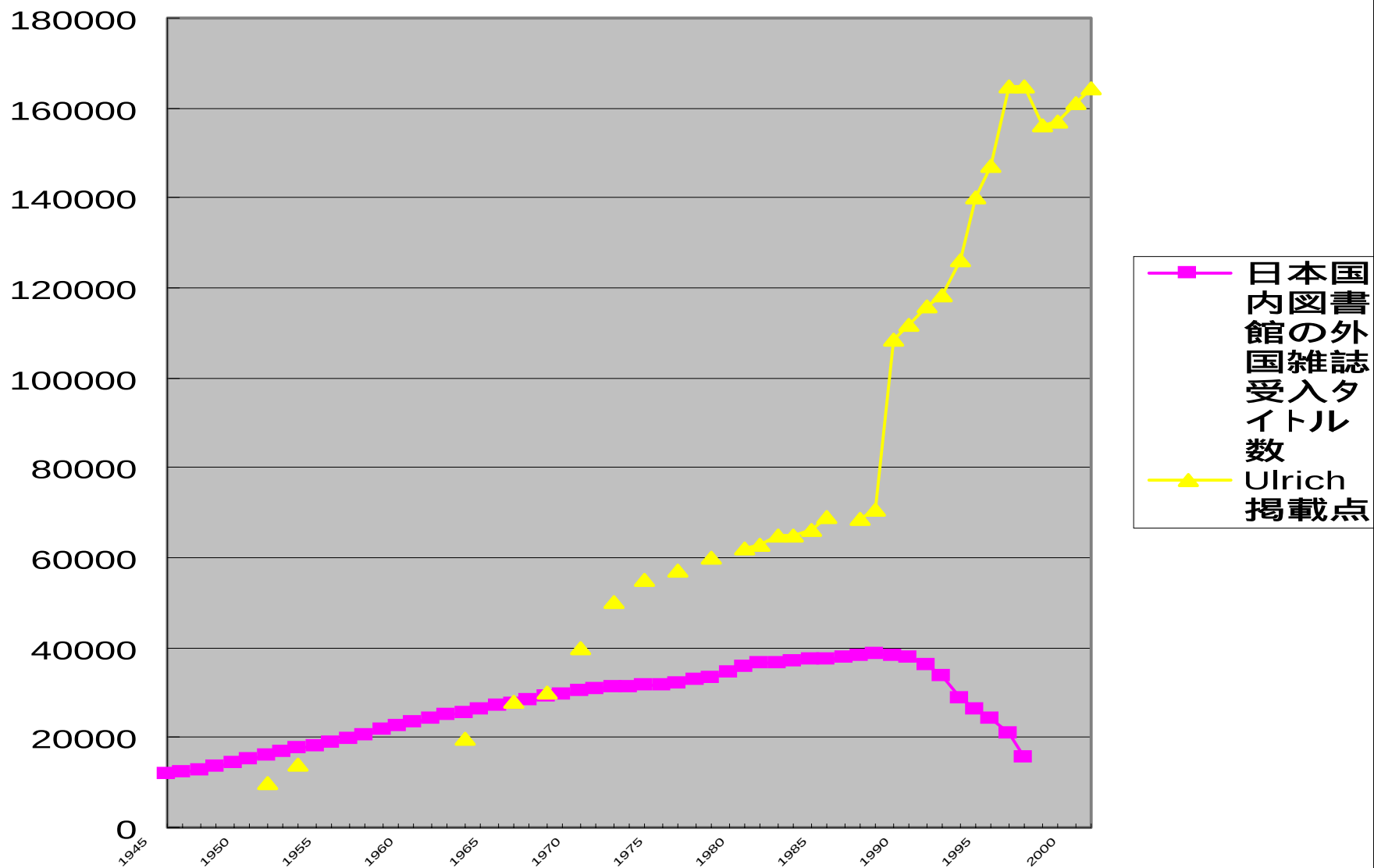
今の文系の研究スタイル

- まったく変化しない人々
- 新しい研究スタイル
 - データベース
 - 全文データベース
 - インターネット
 - ワールド・ワイド・ウェブ
 - サーチエンジン
 - サブジェクト・ポータル
- ひとりではできない、活用できない
 - 図書館にお願いしたいこと

そもそも、電子ジャーナル化とは？

- オンラインジャーナル
 - いろいろな特性
 - 新奇な契約形態
 - いろいろな不安、欠点、危惧
- 図書館側の体制の問題
- にもかかわらず、これしかない
 - 予算の効率運用
 - 学術コミュニケーションコストの全般的な配慮
 - 出版事業の存続
 - 日本でなぜ実現しないのか？
 - 円滑な情報流通

日本国内図書館の外国雑誌受入タイトル数と
Ulrich 掲載点数



各国のコンソーシアム

	ドイツ	台湾	韓国	オーストラリア
名称	Nord Rhein Westfalen Consortium	CONCERT	KERIS	CAUL
参加機関数	24	179 公私立大学図書館 研究機関	152 大学図書館	59 大学図書館 政府研究組織 第三機関
タイトル	3800 有料 2,200 無料 1,600			
契約会社	計4社	計21社(83データベース)	計60データベース以上	計32データベース
	Elsevier Springer Kluwer Academic Press Wiley、Lipincottは準備中	Academic Press Elsevier IEEE Springer EBSCO	IEEE EBSCO OCLC ECO ACM	Academic Press JBC ACS Blackwell Science Wiley
予算規模	USD 3,999,807 (SDのみ)	USD 8,000,000	USD 10,600,000	USD 11,600,000
資金	政府資金	政府資金及び会員	政府資金	会員

東京大学における電子ジャーナル(SD)の利用状況(2000年9月-2001年4月)

アクセス回数	タイトル数	(割合)	内訳			
			購読誌	(割合)	非購読誌	(割合)
1001回以上	27	2.3%	26	2.2%	1	0.1%
101-1000回	369	30.9%	276	23.1%	93	7.8%
11-100回	525	44.0%	234	19.6%	291	24.4%
6-10回	88	7.4%	21	1.8%	67	5.6%
5回	19	1.6%	6	0.5%	13	1.1%
4回	25	2.1%	9	0.8%	16	1.3%
3回	21	1.8%	2	0.2%	19	1.6%
2回	24	2.0%	5	0.4%	19	1.6%
1回	39	3.3%	7	0.6%	32	2.7%
0回	57	4.8%	7	0.6%	50	4.2%
合計	1194	100.0%	593	49.7%	601	50.3%

利用の裏に利用環境

- ネットワーク環境の必要
 - 図書館からのアクセスに意味があるか
 - セキュリティ問題(目的外使用)
- 研究者・学生は、まだタイトルで読む
 - これから変わるかもしれないが、
 - 当面は、分野別に直接ポータル風に
 - どうせプリントアウトするということの支援
- 学生への支援
 - 電子情報の使い方一般
 - とりわけ、科学技術、学術情報について

利用環境の裏に契約

- どんなセールトークも契約しないと信じられない
 - 「使いやすい」インターフェイスが信じられない
 - 契約形態による便宜性の差異
 - 他のコレクション、データベースとの連携の要求は変？
- タイトル・著者(・書評、評判)だけでの購入よりはまし？
 - 「トライアル」はなんのためにあるのか？
 - 先進ユーザの開拓の必要性
- 契約は金額プラス利用条件
 - バックファイル
 - パーペチュアル・アクセス

契約の裏に統計

- 契約は「値下げ交渉」ではない
 - キャンパスごとの(顕在的)ニーズに応じた選択
 - 前提としてのニーズの把握
 - Value for moneyの追求
 - 「非購読誌購読」の意味
 - 潜在的ニーズの把握の重要性
- 利用統計に基づく合理的交渉
 - 「しかし、本当にニーズはあったのか」の懐疑論は当面保留
 - 「図書館のパフォーマンスとしてタイトル数はほしい。しかし使わないものを契約するのは変」
 - 千葉大学の例(理学部・工学部問題)

電子ジャーナルはまだまだこれから

- 出版社にとっても未知の世界
 - どんなサービスが望まれているかを知らない
 - どんな価格体系が合理的であるかを知らない
 - どんな契約システムが適切であるかを知らない
- 研究者・学生にとっても未知の世界
 - 研究成果公開方法を個別研究者へ奪回する可能性と、素朴な当惑とたんなる保守主義
 - 従来型業績評価システムへの不信と、革命的变化への恐れ
 - 研究総コストにおける資料コスト算定の必要性
 - 教育方法のアモルファス化がもたらすもの(雑誌・教科書連携の崩壊?)

要する、図書館から展望を！

- 仲介者としての役割り
 - 「価格」「コスト」のバランスを！
 - 利用環境の統合化、共通化の提案を
 - 統計の共有の主体として
- インストラクションの主体として
 - そもそもそれは何であるかを「啓蒙」
 - 利用、契約、統計、著作権、etc
 - ネットワーク環境(セキュリティつき)の整備
 - より便利に使う方法を指導する
 - 図書館間共同作業の可能性